

[講演要旨] 東南海地震・南海地震の関東での揺れの再現

中村 操・古村孝志，早川俊彦・馬場俊孝

(防災情報サービス)(地震研究所)(海洋研究開発機構)

1944 年東南海地震(12 月 7 日，Mj7.9)および 1946 年南海地震(12 月 21 日，Mj8.0) は戦争中，あるいは戦後まもなくという事情から，明瞭な地震計記録が残されていないこともあり，十分解析がなされているとはいえない．ここでは，地震研究所に残されていた千葉県東金市の記録を元に，気象庁の大手町，横浜の記録の再現を行った．その結果，東南海地震の東金では 12 秒，大手町では 9 秒そして横浜では 11 秒の周期の波が卓越することを確認できた．

東金の今村式 2 倍強震計は幸いにも，ほとんど振り切れることなく，二つの大地震を記録していた．大手町(中央気象台型 1 倍強震計)および横浜(今村式強震計)の記録は一部振り切れているが，後続の波形は忠実に地動を記録していた．これら 3 地点の記録を相互に補完しながら，さらに近年の強震観測記録も利用して地震計の特性を推定し，地震動の再現を行った．図 1 に東金の東南海地震のオリジナル波形を示す．読み取った値に円弧，傾き，および倍率の補正をおこなったものである．成分を 1ch，2ch(水平動であることは確認できる)と示してあるのは，記録に成分名が明記されていないことによる．二つの成分はともにおよそ 5 cm の変位振幅を記録している．同様に，南海地震の記録は，共に 1cm の変位を記録している．二地震の振幅の差は，震源距離の差に加えて，震源過程の差によるものと考えている．前者は熊野灘で発生し，破壊は静岡に向かって破壊が進行したが，これは東金に対して接近する方向である．後者の地震は紀伊半島沖で発生，四国に向かって破壊が進行した．東金に対しては遠ざかる方向である．このちがいが，振幅の差を生み出したと考えている．

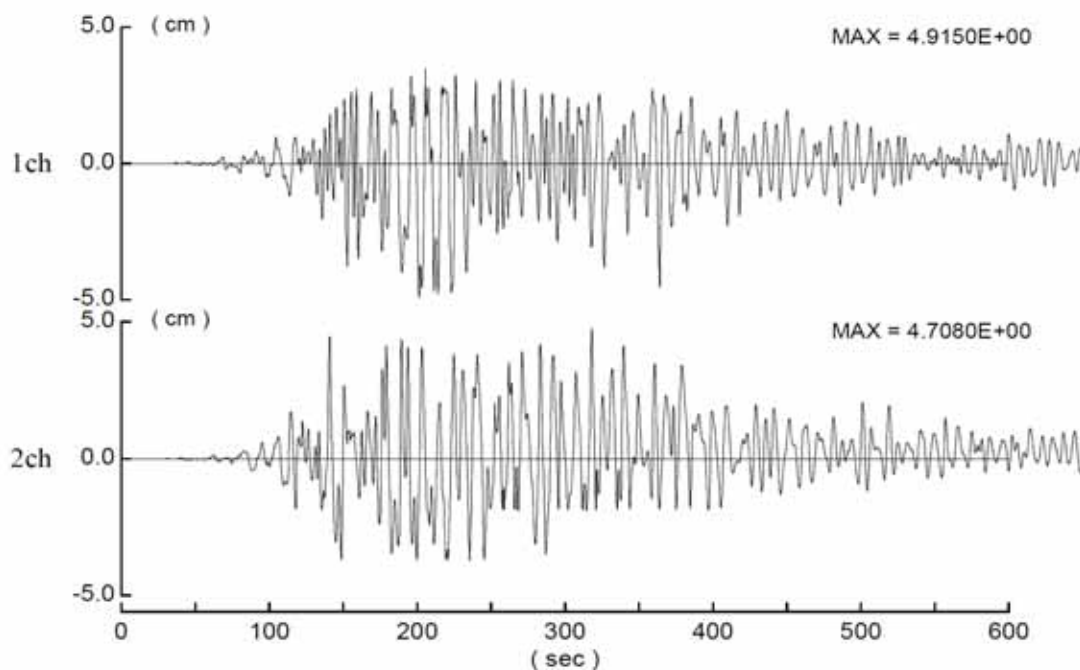


図 1 東金市における 1944 年東南海地震の波形．今村式強震計(オリジナル)